

久々にかかってきた助産婦科同級生の上杉さんからの電話は、少々疲れぎみの様子である。お互い卒業してから道東に根をおろして、それぞれの立場で地域の中で活動してきたつもりだが、私たちも少し年をとったかな、などと思い、逢って肩をたたき合いたい気持ちである。私も開業して1年半、毎日追われるような気持ちで仕事をし、お母さんと赤ちゃんの姿ばかりが目前にちらつき、周りのものが見えなくなっていることに気がつき反省させられた。上杉さんありがとう。

道東の自然を選んで

札幌の看護学校を出て看護婦をしていた私は、助産婦としての出発は遅かった。昭和51年に助産婦科を卒業した時、すでに結婚していた私は、夫の転勤先を希望するにあたり、文句なく日高山脈のふもとの帯広を選んだ。札幌の山とはまた違ったきびしい日高の山脈は、十勝の自然の中であって私を高校時代から魅了してやまないあこがれの山だった。

帯広厚生病院の窓から見える剣岳は美しく、通勤の朝、目前に広がる日高ポロシリ、芽室岳、白く輝く山々に圧倒され心うばわれていた私は、助産婦としての職業意識よりも、1年間は山に夢中という状態のうちに過ぎてしまった。この1年間で私に山心をしっかり植えつけ冬山の素晴らしききびしさ、自然の中で呼吸することの大切さ、自然の中で生きることの喜びを教えてくれたとも言える。そしてこれがその後の人生の方向を決定する重要な要素となり、私の生きる姿勢となっているのだ。

さて、助産婦としての私はというと、無我夢中というか、助産婦とは何ぞや、という疑問をもつところまでにも行きつかなかったというのが本当である。帯広での1年間は助産婦になってよかったとか面白いと思った記憶もあまりな

りれ一随筆 ⑦②

マタニティ・アイ助産院(北海道釧路郡)
春日井六実

く、ただただ十勝の雄大な自然の中で過ごせた思い出と山仲間をなつかしく思うのみである。

したがって、同じ帯広で近くの病院に勤務していた上杉さんともあまり逢うチャンスもないまま、私は夫の転勤と同時に釧路へ来た。結婚と同時にやめるはずだった山も、夫は事故さえおこさなければと、しぶしぶ認めてくれている。自然の中に出向かなければ“呼吸困難”になる私の体質を理解してくれたらしい。

釧路に来て、再び私は素晴らしい自然とめぐり逢うことができた。広大な釧路湿原、奥には知床があり、かすんで見える阿寒の山々も日帰りで行ける。どこに足を伸しても私を満足させてくれる充分な自然がまだ残り、アイヌの人々が名づけた地名と遺跡が散在するこの道東に、私は根をおろすことに決めた。私の人生をこの道東の自然が決定したのである。人間としての私の原点がここにあるのだから仕方がない。幸い夫もこの地に根をおろした仕事につき、それが私に開業を決意させた要因といえる。

助産婦としての目覚め

釧路へ来て公立病院に勤めた私は、助産婦として初めて目覚めたようだった。分娩を扱う楽しさというより、人間としてかわる中で喜びや苦しみをお母さんたちと共有できる楽しさが

自然体で生なる

わかってきたのである。

勤め始めの頃のことである。長くつらい第1期を共にすごし、いざ分娩台へという時になって、「あのう、助産婦さんは来ないのでしょうか」といわれた時のショックから、私にもがぜん助産婦としての自尊心が芽生えたのである。どうもお母さんたちは、助産婦というのは年をとってドッシリとして眼鏡をかけたたくましいオバサンだと思い込んでいるらしい。私は助産婦らしくない代表だった。雪焼けした真黒な顔と、年齢より若くみられがちなオッチョコチョイ。どうも貫録に欠けるらしい。

それから私はメキメキたくましくなっていた。そして夜勤の度に「私が今日あなたのお産を扱わせてもらおう助産婦です。一緒にがんばりましょうネ」といって、無理に貫録をつけてみせたりしたものである。今思えば笑い話だが、きっと卒業したての頃はだれもが一度は味わう無念の思いではないだろうか。

私が助産婦を志したのは看護学生時代のある大先輩の姿が刺激になってのことである。初産で難産だったその分娩は見学している私たちをくぎづけにして、動くことも声をかけることもできなかった。先生も汗まみれの吸引分娩で児心音もおちていた。その時、本当に分娩台が壊れるのではないかと思う程の体格の助産婦さん

が、シッカとお母さんにまたがり、クリステレルをかけた。1回、2回、3回、頼もしいかけ声とお母さんの悲鳴と共に無事に赤ちゃんが生まれた時には、皆息を飲んで涙ぐんでいた。ふと見ると、あのたくましい助産婦さんは分娩台から降りるのも忘れてお母さんと手を取り合って一緒に泣いていたのである。その時の感激を今でも忘れない。あのつらい時にも喜びの時にも、お母さんがすがったのはあのたくましい手だったのだ。私は助産婦になりたいと思った。

開業して、今

あの時の助産婦さんに追いつくのに20年かかったが、たくましさだけはちょっぴり似てきた。あの時の感動を今自分自身の手で受けとめることができる喜びは、何物にも代えがたい。あれだけ私の一部だった山も自然も今、この助産婦としての仕事の喜びと責任の重さの前にちょっぴり息をひそめた感がある。

1 昨秋に開業して今日で145人目をとり上げた。家族入院をさせて人間同士のふれ合いの中で自然分娩が始まると、人間って皆自然の中で生かされ、自然の中に生命が宿るんだと思ったりする。ここは適度に田舎で、すぐとなりが釧路市であるため、対象人口は30万人近くになる。あせらず自然体でゆっくり歩んでいこうと思っている。裏のビニールハウスでは手作りの野菜もとれ、子供たちの遊び場になったりもする。今年はバードテーブルでも作ろう。時には家庭訪問と称してポケットベル持参で近くの湖へバードウォッチングに出かけたりもする。感性を失わないための酸素補給である。どうも体質は変わりようがないらしい。

* * *

このホヤホヤ開業助産婦の私からのバトン年青森市の溝江好恵助産婦に渡します。今年中に開業を目指すはり切りママです。ガンバレ。